

専門家に聞いてみよう!

救急科専門医が伝えたい

“命を守る知識”

命の現場には、日常と地続きの「危機」があります。今回からは大雄会の救急科専門医が、市民の皆さんに本当に知ってほしい知識をシリーズでお届けします。

第一回 救急車を呼んだ方がよいサイン

「様子を見ていたけれどよくならなくて...」。救急外来で診察していると時々こんな患者さんに出会うことがあります。もっと早く来てくれたら、もっと早く治療できていたらと感ずることもあります。突然の体調不良やけがは、誰にでも起こり得ます。「こんなことでかかってもいいのかな?」「救急車を呼ぶべき?」「そんな疑問を持たれたことはありませんか?こんな風に迷ったとき、まず大切なのは「迷ったまま我慢しないこと」です。不安を感じたら、早めに医療機関を受診することで、重症化を防ぐことができることがあります。

「救急車を呼んだほうがよいサイン」も知っておくと安心です。

救急車を呼んだほうがよいサイン

- 意識がない・反応がおかしい
- 顔や手足のまひ
- 突然の激しい胸の痛み
- 広範囲のやけど
- 大量の出血
- けいれんが続く
- 交通事故や転落による大きなけが

い方が良い症状の代表例です。救急外来に救急車で搬送される時、ご自身の病歴やご家族の連絡先をご自身が説明できる状態とは限りません。今の時代ご家族の連絡先は携帯電話の中に保存されていて、第三者が確認することが難しいことは多いです。かかりつけの情報、もしもの時連絡してほしい家族の連絡先等を記したカードやメモを携帯されるといざという時役に立ちます。

このような症状は、命に関わる可能性があります。こうした場合は、迷わず119番へ通報しましょう。

脳卒中や心筋梗塞など症状が出てから治療までの時間が短ければ短いほど後の後遺症が小さくて済む、時間がかかればかかるほどひどい症状が残るという病気があります。

ここに挙げた症状は治療まで一刻も早



監修

総合大雄会病院副院長/集中治療科診療部長
救命救急センター統括部長/医療安全対策室室長

みやべ ひろみち
宮部 浩道 医師

〈主な資格〉

- ・日本救急医学会 救急科専門医
- ・日本集中治療医学会 集中治療専門医

